

播磨大陶器展

— 古墳時代から現代まで —

はじめに

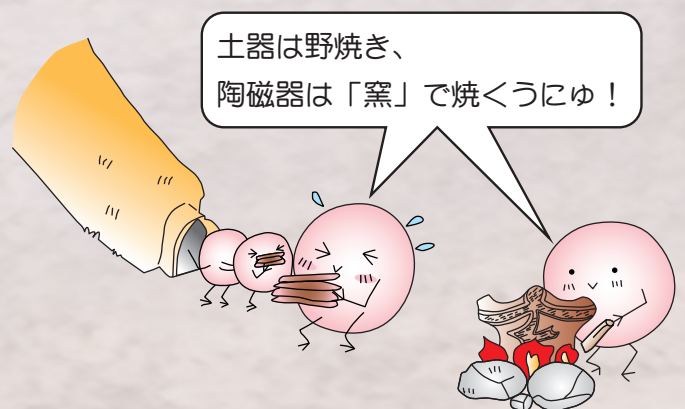
古代から陶器生産が盛んであった播磨地域では、各地区・時代によって個性的な陶器が作られ続けてきました。そうした個性的な陶器の移り変わりは、当時の人々の生活や社会の変化に直結しており、そこに地域や人々の歴史をみることができます。この展示では「**陶器**」をキーワードに、播磨地域の個性的な歴史をご紹介します。

1. 「陶器」ってなに？

粘土をこねて焼いたものを「**やきもの**」といい、簡単にいうと、低い温度で焼けたものを「土器」、高い温度で焼けたものを「**陶器**」と呼んでいます。そして、ひとくちに「やきもの」といっても、作られた時代・作り方・焼けた温度・原料などによって、様々な種類があります。大きく分けると、以下のようなものがあります。

やきものの種類	焼く温度	原料	釉薬（うわぐすり）	代表的なやきもの
どき器 土器	700～800℃	粘土	かけない	縄文土器・土師器など
むゆうとうき 無釉陶器	900～1200℃	粘土	かけない	須恵器など
せゆうとうき 施釉陶器			かける	奈良三彩・灰釉陶器など
せつき 炆器	900～1400℃	粘土	かけない	備前焼・丹波焼など
じき 磁器	1300～1400℃	陶石を砕いたもの	かける	伊万里焼・東山焼など

土器以外のやきものは、焼く際に1000℃ほどの高い温度が必要なため、専用の「**窯**」を造る必要がありました。この「窯」を造る技術は縄文・弥生時代には日本列島に無く、土器しか作ることができませんでした。日本列島では古墳時代に入って初めて陶器の窯が現れます。



2. 古墳時代の陶器—須恵器の登場—

陶器を作るために必要な窯を造る技術は、古墳時代中頃（約1600年前）に日本列島へもたらされました。この時代、朝鮮半島から多数の渡来人が日本列島へやってきたことが分かっており、そうした人々によって、日本列島に陶器窯を造る技術が初めてもたらされました。

日本列島初の陶器は「^{すえき}須恵器」と呼ばれるものです。陶器はそれまでの土器よりも丈夫で、大きな水甕などに適していたため、日本列島で広く普及し、人々の暮らしを大きく変えることになりました。

播磨地域では^{であいようせき}出合窯跡（神戸市）と^{うねはら たなか}有年原・田中遺跡（赤穂市）に最古級の陶器窯があり、全国的に有名です。特に出合窯跡は窯の形状や構造が朝鮮半島のものにとっても近く、日本列島に窯を造る技術が伝えられて間もない頃のもので、全国的にみても最古級の窯跡と考えられています。

最初期の窯では朝鮮半島とそっくりの形の陶器「^{しよきすえき}初期須恵器」を生産していましたが、こうした陶器はしだいに日本列島独自の形を持つ「須恵器」へと変化していきます。出合窯からおよそ50年後に築かれた^{あかねがわ かながさき}赤根川・金ヶ崎窯跡（明石市）では、朝鮮半島にそっくりな形の陶器に混じって、日本列島独特の形のものが見られています。

日本列島に陶器づくりが伝わっておよそ100年、陶器づくりが定着した頃に造られた^{なばのまるやま}那波野丸山窯跡（相生市）や^{しょうふくじ}正福寺窯跡（上郡町）で作られた陶器の形には、日本独自のものが現れており、日本列島の人々が自らの手で陶器づくりを行っている様子がわかります。

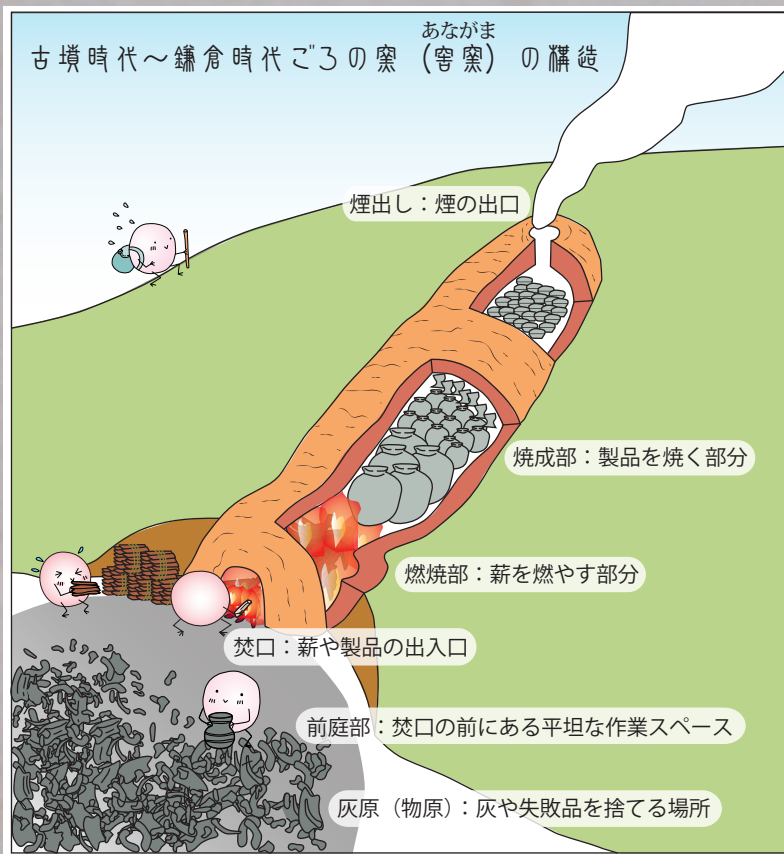
またこのころ、^{さかもといせきはにわ}坂元遺跡埴輪窯跡（加古川市）のように、陶器を焼く窯と同じ形状の窯で、日本独特

のやきものである埴輪が焼かれるようになります。

須恵器は水甕や壺などの容器や、食器として使われたうにゅ！でも火にかけると割れちゃうので、鍋や釜は土器を使って、須恵器は使わなかったうにゅ！



赤根川・金ヶ崎窯跡（明石市）出土須恵器（明石市教育委員会提供）



発掘された古墳時代の窯跡 (飛波野丸山1号窯)

3. 古代の陶器—都へ送られる播磨の須恵器—

飛鳥～平安時代（約 1400 ～ 1000 年前）には西播磨地域を中心に窯の数が激増しており、**山田奥窯跡**（赤穂市）なども飛鳥時代に入ってから新たに開かれた窯の1つです。特に盛んに陶器を焼いていたのは現在の相生市から加古川市にかけての地域で、焼かれた須恵器は播磨地域のみではなく、奈良（平城京）や京都（平安京）の都でも使われていました。これは、**播磨産の須恵器が税金として都へ納められた**（そようちょう 租庸調の調。各地の特産物を税金として納めた。）ため、播磨国の特産物が陶器であったことが分かります。またこうしたことから、当時の窯の多くは地方の役所が経営していたといわれています。

特に**緑ヶ丘**や**西後明窯跡**などの**相生窯跡群**は大規模で、飛鳥～平安時代にかけて、およそ150基の窯が存在し、西日本有数の窯場になっていました。また、古代に播磨国府（国の役所）へ須恵器を出荷していたとされる**峰相山窯跡群**（姫路市）も50基以上からなる大規模な窯跡です。また、**白沢窯跡群**・**志方窯跡群**（加古川市）周辺でも150基近い窯が続々と築かれ、窯業が非常に盛んになります。こうした中でも特徴的なのが志方窯跡群中にある**中谷窯跡群**で、ここでは都の中でも貴族や皇族、宮廷や大寺院といった上流階級特注の高級陶器を生産していました。

また、この時代は日本で初めて瓦葺の建物が登場した時代でもあり、播磨地域では瓦も生産されました。瓦は、専用の窯（がよう 瓦窯）で焼く場合と、陶器と同じ窯で焼かれる場合（がとうけんぎょうよう 瓦陶兼業窯）がありましたが、基本的には寺院を建てる際にその都度近くに瓦窯が造られ、瓦を生産していたといわれており、播磨でも**与井瓦窯**（上郡町）や**西後明・若狭野**（相生市）など各地で古代の瓦が焼かれています。



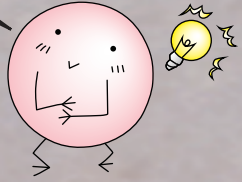
発掘された奈良時代の窯跡（志方窯跡群）
（兵庫県立考古博物館提供）

古代の窯は、古墳時代の窯とほとんど同じ形をしているうにゅ！

ただ、よくみると古墳時代には地下にトンネルを掘るように造っていたものが、平安・鎌倉時代になると、窯全体が地面から飛び出すようになっているうにゅ！

窯を地面の湿気から守る工夫といわれていて、窯の改良が進んでいるうにゅ！

※写真奥の溝のようなものが窯跡。その手前の黒い部分は、「灰原」や「物原」とよばれる、薪の灰や失敗品を捨てたゴミ捨て場です。



4. 中世の陶器－東播系須恵器－

平安時代末（約 900 年前）、全国的にみると陶器の窯は激減していきます。これは律令体制が崩れ、それまで窯を経営していた地方の役所や国の力が弱まり、窯を維持できなくなったからだと言われています。播磨地域でも平安時代後期までは陶器の生産量が徐々に減少していきます。

ところが、平安時代末から鎌倉時代初め（約 900～800 年前）になると東播磨にある魚住窯（明石市）や神出窯（神戸市西区）で突如として生産量が激増します。その原因は、京都で起こった建築ラッシュのためとされています。この

ころはいわゆる「院政期」とよばれる時期で、退位した天皇（上皇）が新たに権力を持ち、大規模な宮殿や寺院を新たに建築していた時期にあたります。その

ため、京都では大量の建築資材が必要となり、大量の屋根瓦も必要となっていました。

当時、東播磨を中心とした地域は皇族や朝廷にゆかりのある人物の荘園や、国の役所が管理する土地になっていました。そのため、新たに建設される宮殿や寺院に替く屋根瓦の生産地として選ばれたのが東播磨地域で、京都へ瓦を出荷することで莫大な利益をあげていたようです。こうして得られた利益と強力な権力者を後ろだてに、東播磨では新たな窯が続々と築かれ、巨大な窯場へと発展します。

東播磨の窯で作られた丈夫な甕や調理器具のこね鉢は、特産品として日本各地へ出荷されていき、鎌倉時代には西日本最大のシェアを誇る窯場へと成長します。また、窯を改良したり、薪を節約するな



窯が密集する神出窯跡
（兵庫県立考古博物館提供）

あんか

どして陶器の大量生産を可能にし、安価に出荷することに成功しました。こうして出現した陶器「東播系須恵器」は全国規模で流通しましたが、こうした陶器にシェアを奪われ、伝統的な陶器づくりを続けていた相生や加古川といった西～中播磨の窯は鎌倉時代の中頃（約 800 年前）には廃業してしまいました。

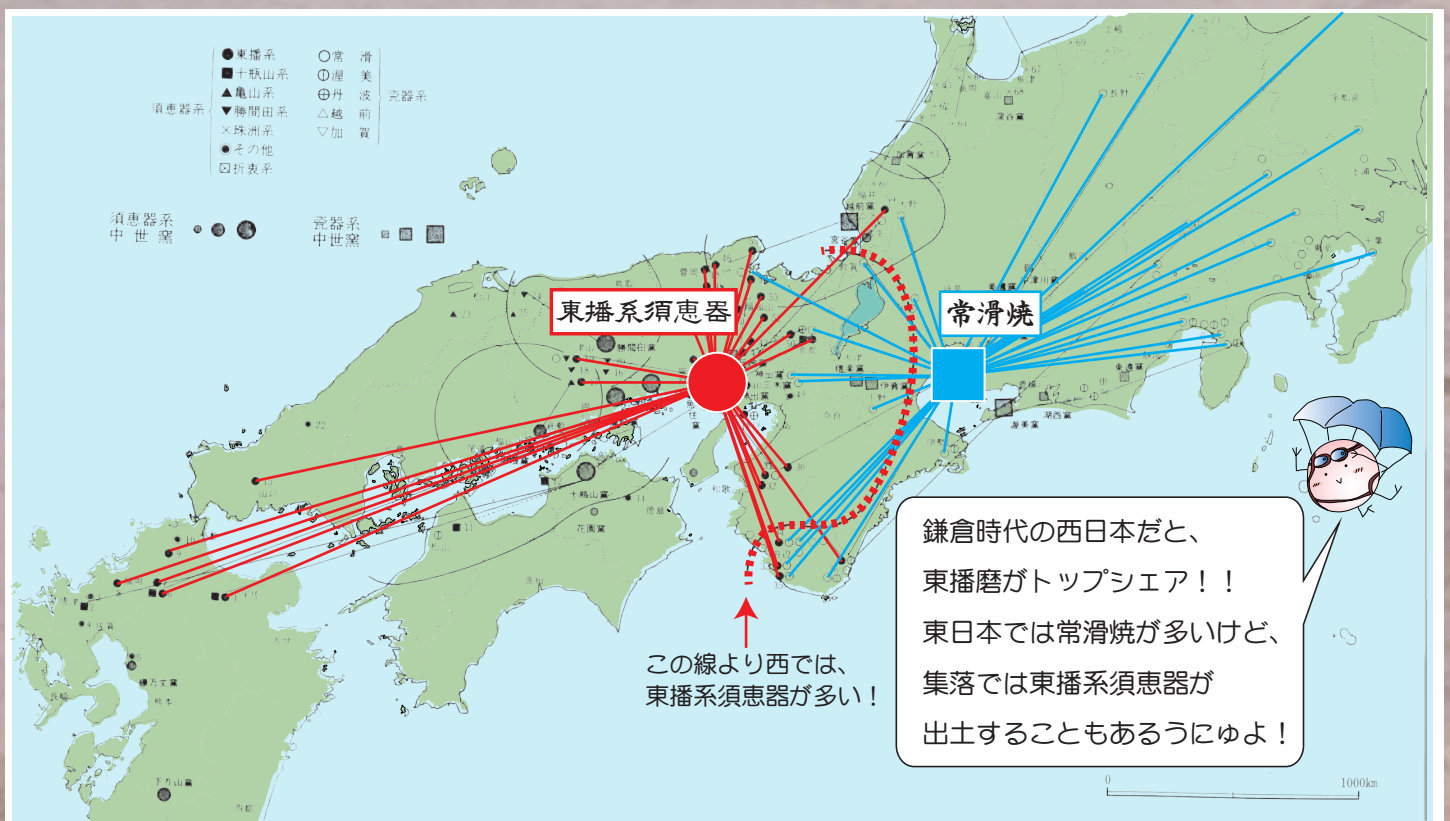


陶器と同時に焼かれた瓦（魚住窯跡群）
(兵庫県立考古博物館提供)

しかし、鎌倉時代末(約 700 年前)になると、次第に東播磨地域からも窯が姿を消していき

ます。その原因は様々なものが考えられていますが、最大の理由は播磨以外の産地にシェアを奪われたためといわれています。このころ、「日本六古窯」とよばれる現代まで続く窯場が盛んに生産を行っていました。備前焼・丹波焼といった播磨周辺の窯場、常滑焼や珠洲焼といった全国的な窯場が発展し、それまで東播系須恵器の主力商品であった甕や鉢のシェアを奪うようになりました。また、西日本各地で瓦器や陶器を生産する小規模な窯が出現し、東播系須恵器の模倣品を生産し、安価に販売したことも、東播系須恵器がシェアを失った原因とされています。

こうして室町時代になる頃（約 600 年前）には播磨から窯が消え、陶器の生産はほとんど行われなくなっていました。



窯場出土遺物からみた陶器の流通圏（吉岡 1994 を改変）

5. 江戸時代～現代の窯－個性的な「国焼」－

江戸時代になると、磁器の生産が始まります。磁器の産地は最初、伊万里（佐賀県）に限られていましたが、次第にその他の地域でも生産されるようになります。陶器は江戸時代前半（約 400～250 年前）は備前、唐津、瀬戸・美濃、京都などが有名で、播磨地域ではほとんど生産されていませんでした。



野田焼の窯跡（たつの市）

ところが、江戸後期（約 250 年前）になると、全国各地で爆発的に窯が増加し、日本各地で個性的な陶器が生産

されるようになります。播磨も例外ではなく、**明石**（あかし明石焼など）や**姫路**（ばんようとうざん播陽東山焼）、**たつの**（の野田焼など）や**相生**（ふるいけ古池焼など）で個性的な陶磁器窯が出現します。こうした窯は、新たな産業として始められ、藩が管理・経営したもの（はんよう藩窯）と、地元住民の手によって始められたもの（みんよう民窯）がありました。こうした新たに出現した窯場は「**国焼**」（くにやき）とよばれ、それぞれ個性的なやきものが制作されました。

明治時代（約 150 年前）になると、江戸時代の藩窯の多くは民間の窯となりましたが、その多くは**小規模なものであったため経営難に陥り、廃業していきました**。民窯の多くも大規模な生産地以外は衰退し、廃業するものがほとんどでした。また、**赤穂御蔵焼**（あこうおくら）のように、失業した士族の職を確保するために創始された窯も出現しましたが、そうした窯は長続きせず、廃業していきました。

江戸時代から伝統的に陶器を生産していた播磨の窯は、戦後まもなくまでは生産していたものもありましたが、現在は全て廃業しています。実は播磨地域では、江戸時代から連綿と続く窯というものは現存しておらず、いずれも一度廃業や断絶を余儀なくされています。

しかし、戦後こうした播磨伝統の焼き物を復活させる機運が各地で強まり、姫路市、たつの市、相生市、赤穂市などでかつての陶磁器窯の復興が行われています。

赤穂市では大島黄谷が江戸時代末に創始し、一度断絶したものの、復活した**赤穂雲火焼**（あこううんか）が有名で、江戸時代の伝統を未来へと引き継ぐ努力が続けられています。



赤穂御蔵焼（赤穂市）の窯道具など

おわりに

約 1,600 年間におよぶ播磨の陶器の歴史は、時代ごと、地区ごとそれぞれに個性的な歴史を持っています。

その歴史は現在でも制作されている個性的な陶器に引き継がれており、今後も人々の努力によって、播磨の陶器の歴史は続いていくことでしょう。



雲火焼再現に成功した窯（桃井ミュージアム）

出品目録

1. 「陶器」ってなに？

赤穂市 市内各地遺跡 土器・陶磁器ほか 赤穂市教育委員会蔵

2. 古墳時代の陶器－須恵器の登場－

神戸市 出合窯跡・出合遺跡 初期須恵器・瓦質土器ほか 岡山理科大学考古学研究室蔵

赤穂市 有年原・田中遺跡 初期須恵器ほか 赤穂市教育委員会蔵

明石市 赤根川・金ヶ崎窯跡 須恵器ほか 明石市教育委員会蔵

相生市 那波野丸山窯跡群 須恵器ほか 当館蔵

上郡町 正福寺窯跡 須恵器・窯壁ほか 当館蔵

加古川市 坂元遺跡埴輪窯跡 形象埴輪 兵庫県立考古博物館蔵

3. 古代の陶器－都へ送られる播磨の須恵器－

赤穂市 山田奥窯跡 須恵器・窯壁 当館蔵

上郡町 与井瓦窯跡・与井廃寺 瓦 当館蔵

相生市 相生窯跡群 須恵器・窯壁 当館蔵

姫路市 峰相山窯跡群 須恵器・窯壁 当館蔵

加古川市 白沢窯跡群 須恵器・窯壁・人形土製品ほか 兵庫県立考古博物館蔵

加古川市 志方窯跡群 須恵器・窯壁 兵庫県立考古博物館蔵

4. 中世の陶器－東播磨系須恵器

赤穂市 西有年・大山窯跡 初期備前焼・窯壁 赤穂市教委蔵

神戸市 神出窯跡群 東播系須恵器・窯道具・瓦 兵庫県立考古博物館蔵

明石市 魚住窯跡群 東播系須恵器・瓦 兵庫県立考古博物館蔵

5. 江戸時代～現代の窯－個性的な「国焼」－

赤穂市 御蔵焼 窯道具・製品 赤穂市教委蔵

赤穂市 赤穂焼 作品 赤穂市立歴史博物館・当館蔵

相生市 古池焼 窯道具・製品 相生市立歴史民俗資料館・当館蔵

たつの市 野田焼 窯道具・製品 たつの市立龍野歴史文化博物館・当館蔵

赤穂市 赤穂雲火焼 雲火焼現代作品 雲火焼展示館桃井ミュージアム蔵



本展を開催するにあたり、以下の方々にご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

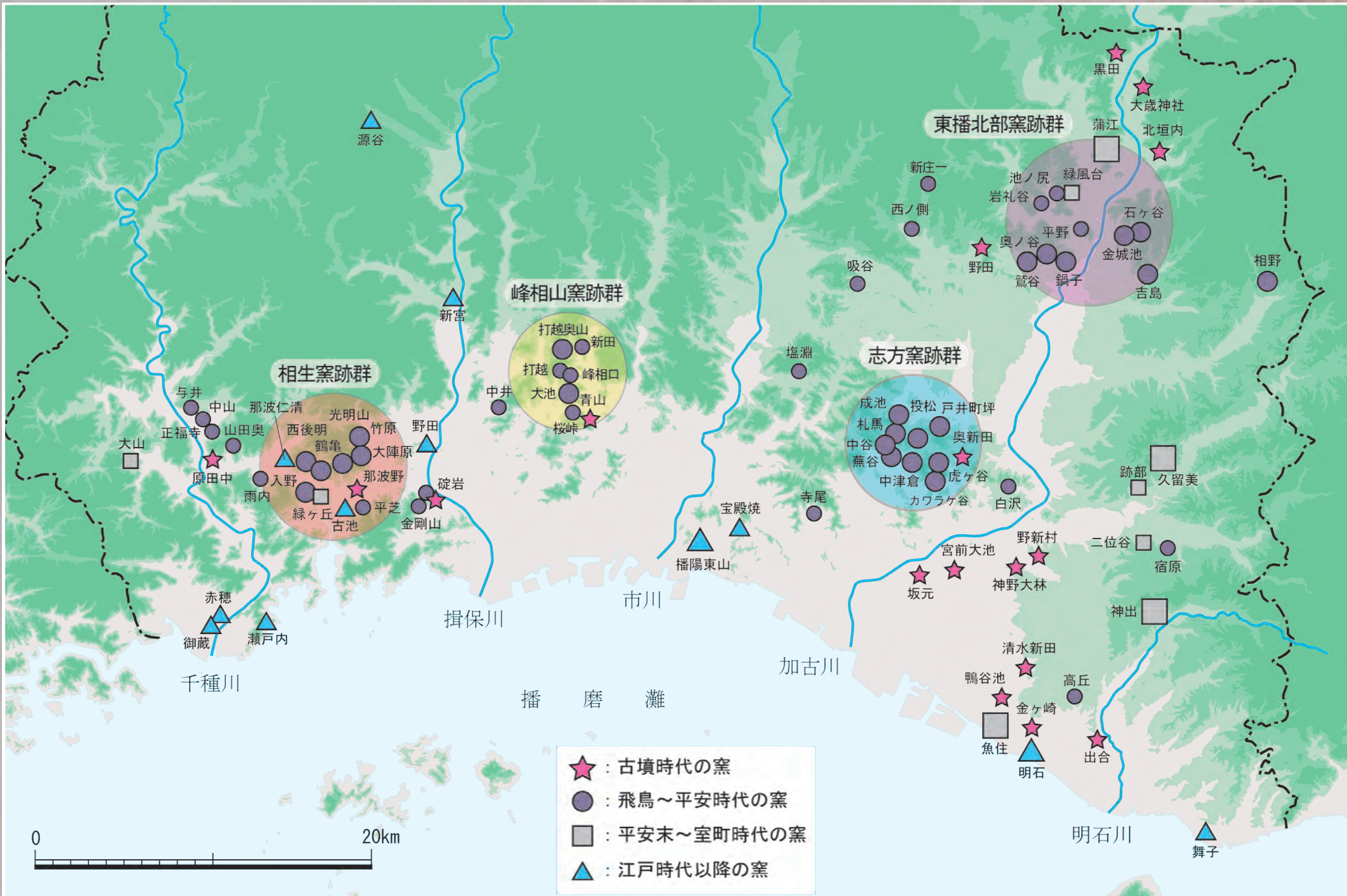
（機関・団体）相生市立歴史民俗資料館・明石市教育委員会・赤穂市立歴史博物館・赤穂瀬戸内窯・

岡山理科大学考古学研究室・たつの市立龍野歴史文化資料館・備前市教育委員会・兵庫県立考古博物館・

桃井ミュージアム・

（個人）石井 啓・池田征弘・稲原昭嘉・亀田修一・木曾こころ・新宮義哲・長棟洲彦・長棟光亮・

中濱久喜・菱田哲郎・桃井香子・森内秀造



- ★ : 古墳時代の窯
- : 飛鳥～平安時代の窯
- : 平安末～室町時代の窯
- ▲ : 江戸時代以降の窯

播磨地域の主な窯跡

兵庫県教委 2011『兵庫県遺跡地図』・青木 1993『兵庫のやきもの』等を参考に作成